身近なまちの風景物語(34)

穏やかな祈り

山村や田園地帯を歩いていると、ふと道端で小柄な石仏に出くわすことがある。長く風雨に晒された様相で、歴史が感じられる。一方、手作りでカラフルな帽子や前掛けがかけられたり、野に咲く花が手向けられたりしている。見ると微笑ましく、また安らかな気分になる。

各地で路傍に置かれた道祖神を見かける。道祖神には、道を守る、村を守るというようなご利益がある。村のようにある範囲の土地を守るということから、村落や子どもの守り神、疫病や邪悪の侵入防止、交通安全、害虫防止による豊作祈願など、民間信仰の神である。

道祖神は双体道祖神や文字碑などがあり、多種多様な形態であるが、地域によって共通した特徴がある。決して仁王像のように睨みつけて圧倒するような姿ではない。石造であっても優しい像であり、碑である。足元で謙虚に佇んでいる。

石像、石碑や石祠を多く見かけるが、木造の道祖神が屋内で管理され、祀られているケースもあるという。男女一対の双体道祖神は、夫婦円満、縁結び、子孫繁栄などが体現されている。

こうした道祖神が置かれる場所にも意味がある。その信仰の主旨から、集落の端にあることも多い。峠や道の辻、三叉路などに置かれている。

道祖神が、そこから先には一つのまとまりのある集落があると暗示している。それを横目に見て、住民は帰ってきた、来訪者はこれから入ると、それぞれに思いを胸にする。

いずれの道祖神も住民によって大事にされている。これは道祖神を見て感じる率直な印象だ。道祖神にまつわる祭りを毎年行っている地域もある。日常的に目にする道祖神を地域の人々が身近で不可欠な存在として、親しみと愛着を注いでいる。

野中 勝利
筑波大学　大学執行役員　芸術系長　教授

挿絵：久田琳佳子（筑波大学大学院博士前期課程２年）